

# 第 6 章

## 山形大学 F D 実態調査アンケート



## 第6章 山形大学 FD 実態調査アンケート

### はじめに FD 実態調査アンケートについて

FD 実態アンケートは、平成 17 年 10 月に教育方法等改善委員会が本学の教養教育特別事業で行われた FD (ファカルティ・ディベロップメント) 活動への参加状況を調査し、今後の FD 活動の参考にするために実施したものである。筆者は改善委員会のメンバーではないので、このアンケートの立案、実施には関わっていないが、高等教育研究企画センターがその分析を依頼されたため、多忙な教育方法等改善委員に代わって、この章を執筆することになったのである。

このアンケートは、平成 11 年以来的教養教育改善充実事業による FD 活動のすべて(74 項目)について参加、不参加(あるいは実施・未実施)を問う内容と、FD 活動への要望を問う自由記述欄によって構成されている。回答欄が 74 項目と多数であるのに加え、記憶が曖昧な 6 年前までさかのぼって記載しなければならないため、回答者に相当の負担をかけたものと思われる。自由記述欄にその辺の苦労や不満について書かれたものも少なくない。

たとえば、「3 年以上の前のことはあまり記憶がさだかではありません。申し訳ありません」(人文学部教員)、「類似のものが多く参加・不参加等記憶が確かでないものについてはチェックをしませんでした」(理学部教員)、「よくおぼえていられるはずもない昔のことをアンケートで求めて何の意義があるでしょうか?」(医学部教員)などである。

アンケートは回答者の負担をできるだけ軽減し、しかも回収後の集計・分析が容易なように設計するのが鉄則である。負担が大きいと回収率も下がってしまう。しかし、この点での工夫が今回のアンケート調査には不十分だったように思われる。もし今後も FD 実態調査アンケートを行うのであれば、設問＝選択方式を採用するなど、回答・集計のしやすい方式で実施するよう、教育方法等改善委員会には要望しておきたい。

その都度出席をとっていれば、このようなアンケートの必要はないではないかという疑問も寄せられている。「参加状況は把握なさっていないのですか」(人文学部教員)、「出欠をとっておいて下さい。昔のことはおぼえていません」(工学部教員)などの意見である。しかし、毎回の参加人数はわかっても、同じ顔ぶれが何回も参加しているだけなのか、そうではなく一定の広がりを持っているのかはわからない。参加者の広がりを調べるためには、このような教員の全数調査が必要になるであろうことは理解できる。

ただし、教養教育の授業改善アンケートについては、毎年「結果の一覧がすでに報告書『教養教育 授業改善の研究と実践』で発表され、その実施状況も明らかになっているため、今回のアンケートに含める意味はなかったと思われる。しかも、授業改善アンケートの平成 11 年度以来の時系列分析がすでに第 3 章で明らかにされている。したがって、ここでの分析でも授業改善アンケートについては割愛させ

ていただいた。

### 1. アンケート回収率と FD 活動への参加状況

図表 1 FD 実態調査アンケート回収率

学部	教員数	回答数	回答率
人文学部	89	44	49.4%
地域教育文化学部	103	47	45.6%
理学部	75	20	26.7%
医学部	257	69	26.8%
工学部	167	66	39.5%
農学部	64	27	42.2%
その他	13	1	7.7%
合計	768	274	35.7%

アンケートの回収率は図表 1 の通り、全学では 36% である。学部別に見ると、教養教育の幹事 3 学部のうち人文、地域教育文化学部はそれぞれ 49%、46% と半数近い回答率であるのに対し、理学部の回答率が 27% と低いのは意外であった。

今回の調査は教養教育改善事業による FD 活動への参加状況についてのものであり、学部独自の FD 活動は含まれない。したがって、教養教育担当教員の少ない医・工・農学部の場合、アンケートへの関心は低いであろうと思われたが、それにもかかわらず農学部(42%)と工学部(40%)は比較的高い回収率となった。

また、工学部の教員からは「工学部内では専門教育の FD が行なわれておりますが、教養教育の FD は小白川キャンパスでの行事なので、時間的、距離的制約が大きく参加が困難です」という意見や、「教養教育の FD には参加していませんが、工学部の FD 活動に参加し、授業アンケート実施、教育改善に努力しています」という意見、あるいは「電気電子工学科では平成 16 年度より交代で授業の公開・参観を行なっている。私は平成 17 年度前期に授業を公開したことになるが、このアンケートでは反映されない。小白川キャンパス以外の事情もくみあげられるアンケートにしてほしい」という意見が、自由記述欄に寄せられている。以上の指摘のように、教養教育改善充実特別充実事業への参加状況だけで、FD 活動全体を判断しないように注意せねばならない。

図表 2 アンケート回答教員内訳

山形大学赴任年度	人数	構成比
平成 11 年 4 月以前	144	52.6%
平成 11 年 8 月以降	113	41.2%
不明	17	6.2%
合計	274	100.0%

図表 2 はアンケート回答教員の山形大学への赴任時期別の内訳である。FD 活動は平成 11 年 9 月の教養教育ワークショップ以降であるから、平成 11 年 4 月以前に山形大学に赴任していれば、それ以降 53 回実施された FD 活動にはすべて参加可能と考えられる。しかし、平成 11 年以降

赴任した教員は赴任した時期によって、参加可能回数が異なってくる。それを1人1人計算して平均値をもとめ、FD活動への参加率を計算したのが、図表3である。平均参加回数は小白川地区の教員の場合は約5回、それ以外(医・工・農学部)は約2回となっている。

図表3 FD活動への平均参加回数  
(平成11~17年度前期)

地域	一人当たりの参加可能回数	参加回数(平均)	参加率
小白川地区の教員	44.3	5.1	11.6%
小白川地区以外の教員	41.6	2.1	5.0%

注: 小白川3学部等には学術情報基盤センターと教職研究総合センターを含む。

平成11年度から平成17年度前期まで53回のFD活動があったが、山形大学への赴任が平成11年度以降の教員が41%もいるためアンケート回答教員の平均参加可能回数はそのぶん減少する。表の一人あたり参加可能回数はその修正した数字を示したものである。

FD活動への参加回数別の分布を知るために作成したのが図表4と図表5である。図表4はこの7年間におけるFD活動への参加状況を参加回数順に分類したものである。しかし、これでは赴任時期の関係で参加できない部分が含まれてしまうため、その部分を調整するために作成したのが図表5である。

図表4 FD活動への参加回数分布  
(平成11~17年度前期)

FD研修等への参加回数	小白川地区教員		小白川地区以外の教員	
	人数	構成比	人数	構成比
21回以上	6	5.6%	0	0.0%
11-20回	14	13.0%	5	3.3%
6-10回	12	11.1%	11	7.2%
5回	3	2.8%	2	1.3%
4回	7	6.5%	9	5.9%
3回	8	7.4%	18	11.8%
2回	8	7.4%	8	5.3%
1回	20	18.5%	36	23.7%
0回	30	27.8%	63	41.4%
合計	108	100.0%	152	100.0%

注: 平成17年度後期赴任の教員14名は集計から除いた。

図表5 FD活動への参加率分布  
(平成11~17年度前期)

FD研修等への参加率	小白川地区教員		小白川地区以外の教員	
	人数	構成比	人数	構成比
51%以上	4	4.0%	1	0.7%
21-50%	19	19.0%	8	5.6%
11-20%	16	16.0%	14	9.8%
1-10%	33	33.0%	58	40.6%
参加なし	28	28.0%	62	43.4%
合計	100	100.0%	143	100.0%

注: 平成17年度後期赴任の教員14名と赴任時期不明の17名は集計から除いた。

小白川地区の教員についてみると、21回以上参加した教員が6人(5.6%)を占め、6回以上参加者の合計では約3割(29.6%)を占めるのに対し、参加0回が27.8%となっている。6回であるとほぼ毎年1回は何らかのFD活動に参加している勘定になるが、それはほぼ図表5のFD活動参加率11%以上の層に該当する。その人数は全体のほぼ4割を占める。まずまずの参加状況と言えるかも知れない。ただし、小白川地区以外の教員の場合は、0回が約4割で6回以上が10.5%となっている。

## 2. 自由記述欄から

自由記述欄記載者の割合は約2割(18.9%)であった。FD活動にたいする意見や要望等も寄せられており、それらについては教育方法等改善委員会に内容を伝え、今後の改善に生かしてもらえるようにしたい。

自由記述で比較的多かったのがFD合宿セミナーについての意見である。この5年間のFD活動を総括し、内容と効果について詳細に検討すべしと言うもの、もっと実践的な内容(プレゼンテーションの方法など)を盛り込んで欲しいというもの、などである。このように参考にすべき建設的な意見も多いが、FD活動に関する批判的意見の中には誤解や無理解によると思われるものも少なくない。

本学の教養教育に関するFD活動については、平成14年度に行われた大学評価・学位授与機構による外部評価でも、特に優れた点として高く評価されている。(大学評価・学位授与機構「教養教育」評価報告書(平成12年度着手継続分 全学テーマ別評価)山形大学平成15年3月、p.4参照)。しかし、そのことは学内ではあまり十分に知られてはいないようである。

FD合宿セミナーをはじめ、教養教育改善充実事業によるFD活動は参加者に毎回アンケートをとり、その結果(の一部)は報告書(「教養教育授業改善の研究と実績」)に掲載されている。それらの意見は担当者によって分析され、次のFD活動に反映されているはずであるが、その点についての説明がこれまでやや不十分だったように思われる。寄せられた意見や感想にたいする主催者側の説明が不十分だったことにより、FD活動にたいする誤解や無理解が解消されずにいるとすれば不幸なことであり、教育の改善を進める際にもマイナスである。

FD活動参加者によるアンケート結果への対応を充実させることによって、FD活動にたいする信頼感は一層深まるに違いない。毎回大変な努力をされている主催者の仕事をさらに増やすことになるのは申し訳ないが、FD活動の一層の発展のため、アンケートに関するアフターケアの充実も、是非お願いしたいと思う次第である。